

小学校英語のクロスカリキュラムに学ぶ中学校の授業作り

山本 玲子

(京都教育大学附属京都中学校)

English Instruction to Junior High School Students Based on Cross Curriculum at Elementary School

Reiko YAMAMOTO

Kyoto Junior High School attached to Kyoto University of Education

2009年11月30日受理

抄録: 本研究は、2007年度の研究「中学生に対するライティング指導」の成果を生かしさらに深化したものに結実させるため、新たな学習者を対象に行った実践的研究である。小学校英語において特徴的なクロスカリキュラムの視点を中学校英語に導入する試みでもある。テーマに対する学習者の深い理解と情動の表出が、中学生段階の自己表現活動には不可欠であると前回考察した。そのためには教科を越えた取り組みが効果的であると考えたためである。中学校には学習指導要領に沿って教科別教員が授業を担当しているという制限があるが、学校独自の行事に向けた取り組みを中心に据えることで、クロスカリキュラム的指導を実現させることができる。本稿は、その教科を越えた学びが、学習者の内的感情や観念を揺さぶり、学習させられているという意識よりも、真実を知り自分自身の価値観を確立しそれを他者に伝えたいという原始的本能に訴えることができることを実証しようとするものである。

キーワード: (クロスカリキュラム, 小中連携, 自己表現)

I. はじめに

小学校で英語活動が導入されたにも関わらず、中学校現場において中学校英語が変わったという実感はまだない。アルファベットや簡単な会話表現を既に知っているためスタートがスムーズである、または英語に対して物怖じせずALTとも緊張せず話することができる、といった表面的な変化は確かにあるかも知れないが、その差は残念ながら夏休みあたりにほぼ均されてしまう微々たるものである。小学校英語が時間面でも人員面でもより本格的に導入されれば抜本的な変化が望めるかも知れないが、現状はそこまでに至らない。むしろ小学校教員への負担増や英語嫌いな生徒を作ることへの不安が聞かれるのも当然である。「小3で1割英語に挫折感」と題した読売新聞の記事(2009.8.27)は、「条件が整わなければやらない方がまし」という関係者の談話と共に、暗礁に乗り上げている台湾の小学校英語の現状を報告している。

しかし、中学校英語の行き詰まり(停滞と言ってもよい)を解決するための一条の光となりうる小学校英語に期待を寄せる中学校教師は、筆者だけではないだろう。筆者は小学校で英語を教えた経験を通し、賛否両論の小学校英語ではあるが、そこには中学校英語が学ぶべき言語教育の原点があると感じた。語彙定着や文法規則の定着を急がず、言葉を好きにならせること、言葉の魅力に触れさせることが目標であるということは、担任の裁量で文字通り何をやってもいいのである。しかもその特徴的な指導の中には中学校でも十分に導入可能なものがある。本実践は、小中の壁を越え、「ことばの教育」の原点に立ち返って両者をつなぐことで中学校の英語の授業

改善を目指した取り組みである。

中学生の学力は低下している。小学校英語の導入、コミュニケーション重視の学習指導要領および教科書への大幅な変更、英語教員悉皆研修といった改革の波を体験してきた英語科においても例外ではない。英語嫌いを作ることが小学校英語のデメリットの1つに挙げられていることが皮肉に聞こえるくらい、教科書が薄くなりコミュニケーション活動という名のゲームが増えた中学校において、生徒の英語嫌いはなくなる。学習内容が減れば負担が減り英語が好きになると短絡的に考えることはできないのである。中学校英語の行き詰まりの一因として、「コミュニケーション能力育成」という理念が曲解され、オーラルでの自己紹介や日常会話のテクニックのみが重視されてきたことが考えられる。小学生や中学校初期段階は別として、中学3年生の生徒が、買い物や道案内の会話に終始する授業を楽しんでいるとは思えない。学習者は、発達レベルに合った知的負荷を求めるものである。学校英語は、生徒の心を動かして初めて「テクニックを覚える暗記教科」から「人と人をつなぐ生きたことば」に変われるはずである。

小学校英語は、まさにその「生徒の心を動かす」という意味で成果を上げている。一方で、小学校で生き生きと英語を発信していた子どもたちが、中学校入学後、徐々にコミュニケーションへの意欲関心を失うという現実がある。コミュニケーションへの意欲関心の継続維持は、小中をつなぐ鍵である。まず、中学生が真似ることのできない要素である小学生特有の無邪気さや素直さは別として、小学校英語特有の、生徒の心を動かす要素を分析した。その中で特に次の二点に着目した。

- (1) 子どもの成長段階に合った「心を揺さぶる体験」（「スイミー」の劇や、全身で味わうリズム練習・歌・手遊びなど）を通して、子どもたちは「心と体で」英語を受け止めながら、自己発信につなげている。
- (2) 担任が全教科を担当するため、教科にしばられず、算数（計算）や社会（地図）など、クロスカリキュラム的に英語に親しませようとする傾向がある。

小学生にとって英語は、使うためのもの・使ってみたくなるもの・使って楽しいものであり、それ以上でもそれ以下でもない。担任と過ごす生活の一部になっていればこそ「なぜ英語で計算する必要があるの？」と疑問に思うこともない。テストがあり義務であり暗記事項に溢れている中学校英語が、実現したくても絶対にできなかったことを、易々と実現させている小学校英語を目の当たりにし、一種のカルチャーショックを受けた後に考えたのは、中学校でこれらを導入できる可能性はないかということだった。小学校英語を経験した中学生なら、受け入れる素地は持っているはずである。同じ方針で継続指導することは、小学校英語と中学校英語の連携に寄与することにもなる。最終目標として、特に中学生の学力低下が著しいと言われているライティングにおける自己発信と定めることとした。前年度、学習者自身のテーマに対する深い理解と自分自身の情動の表出が、中学生段階の自己表現活動には不可欠であるという考察より、ライティングに焦点化した実践的研究を行ってきた。それをさらに深化させる目的で、英語という教科から一旦距離を置き、教科を越えた取り組みを通し、生徒の心を揺さぶることが真の「自己発信」ひいては英語によるコミュニケーションにつながる、という仮説のもとに再度実践的研究を行うこととした。

Ⅱ. クロスカリキュラムの意義

1. 人間性教育としての英語

Harmer(1983)は、教室における活動はインプットとアウトプットに分けられるとした上で、アウトプットをさ

らに「練習」と「コミュニケーション・アウトプット」に分けた。特に後者は、言語習得の基盤となるものであるとした。決められたルールに従って決められた場面を英語で表現するのは練習に過ぎず、自分自身の考えや思いを表現するために、言語そのものから必要な言葉を選ばなければならない状況を生徒に与えなければならないのである。英語の授業内の生徒しか見ていない教師には、その状況を作り出すことには限界がある。小学校英語でその状況作りが素晴らしいと感じることが多いのは、その生徒、その学年集団に生活を通して深く関わる担任が担当していることが大きな理由である。例えば中学3年生を例にとると、テロや戦争が起こった翌日の公民や歴史の授業では、現在の国際情勢について理解と思考を深めるであろう。その直後、英語の授業でまったくそれに触れず、現在完了の単元だからと「今までに経験したことを表現しなさい」と言われて、生徒の気持ちは入るだろうか。最も興味関心のある題材について、社会科なら社会科の切り口から、英語科であれば英語科の切り口から学習できれば、生徒の情動は大きく動かされ、学ぶことに対する意識も変わるはずである。

斎藤（1984）は、バタンドリルを中心とした練習ではかなり流暢に発話できる学生が、自由な会話では大きな退行現象を示すケースを報告し、自由会話のみに必要とされる「自分の力で付け加えなければならないこと」は、「表現する思想・内容を持っている」ことで初めて創り出されると論じている。このようなアウトプットは、学習ではなく、多くの様々なインプットに接することにより自然とできるようになる機構である（斎藤他、1986）。インプットは here and now（具体的で身近なもの）の原則と意味ある状況作りが大切であり、生徒が自己実現をめざせる教育は、情意的指導によって可能となる（渡邊他、1988）。渡邊はさらに、生徒は表現欲求を始めから持っており、理想的な情意フィルターの状況下での「理解できるインプット（comprehensible input）」によって、心が活性化され、自然に言語産出（creative output）への芽が発生してくると論じ、このような教育を人間性教育（humanisitic education）と呼んだ。

このように理想的な情意フィルター作りや心の活性化は、英語を通して行われる必要はない。山田（2006）は日本語が、心の世界を築き上げる最も大切な道具であり、それが結果的に英語を学ぶための基礎体力となると論じている。日本語で他者と交わることで、日本語を通してあるテーマを深く理解したり情動を動かされたりする体験が必要なのである。

2. 生徒の学びの構造

1年前にも、中学3年生を対象に、沖縄修学旅行をテーマに、国際理解・平和学習に関するライティング指導を英語科で行った。情動を動かされ、表現する思想・内容を持つことが豊かな言語産出につながることを実証してきた。英語科単独で行える授業の可能性をある程度追求できたと考える。

その成果を受け、本実践では、1年下の学年集団を対象に、沖縄修学旅行に向けての学年を挙げての取り組みをクロスカリキュラム的にとらえることとした。学年教師団の意識が高く、2年生時より既に事前学習を開始していたため、クロスカリキュラム的な取り組みは自然と始まる空気があった。

英語科における平和学習は、筆者が3年生を担当する際に例年行っているものとほぼ変わらない。良い教材であれば採用教科書の枠を越え、また語彙・文法上の未習既習の枠を越えて導入している。教材はそれ自体がいずれも心を打つものであるが、中学3年生は「平和学習」という直球のテーマを避けたがり、「かわいそう。戦争はいけない。」と通り一遍の反応しか帰ってこないのが常である。本実践では、クロスカリキュラムを通し学校生活の大部分を占めることになる一連の学びが、表面上でなく生徒の心を揺さぶるレベルまで彼らの内面に訴えることに期待した。そのため学習旅行に関わる学びを、事前学習・現地沖縄での実体験・実体験から戻ってきた

段階と3段階に分け、生徒の学びはどのように広がりうるのか考察することとした。図1は、英語科単独の学びと比較し、クロスカリキュラムを通してどのように生徒の学びが達成されていくかを図示したものである。

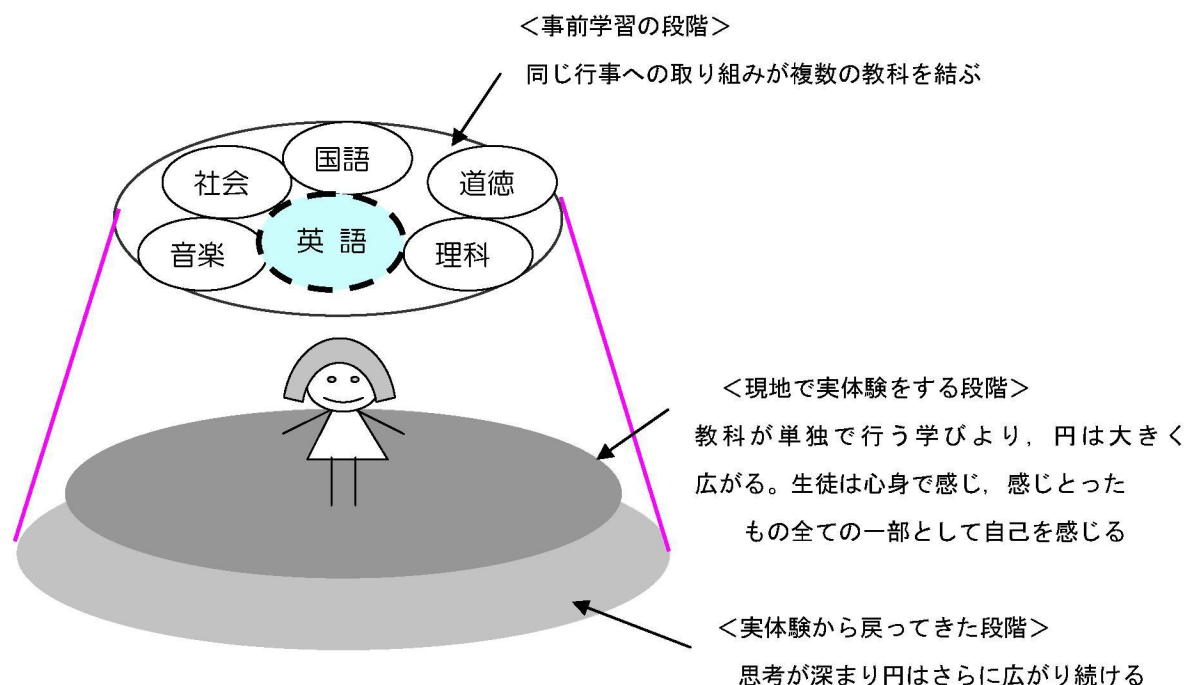


図1 クロスカリキュラムと学びの構図

＜事前学習の段階＞英語科単独の取り組みで達成する学びのレベルは小さな円（破線）にしかない。平和学習の内容も心を揺さぶるに至らず、生徒の頭の中で理性的に整理された英語の知識が頭に残るのみである。しかし、大きな円（実線）のように様々な教科が同じ内容を同時並行でしかも異なる角度から取り上げることで、生徒の理解や学びは多面的に行われることとなる。その時点で学習内容は教科の学習という枠を越え、生徒を取り巻く環境そのものになる。休み時間にも熱心に千羽鶴を折る状況がそれを象徴している。これは、生徒が教科学習という縛りから自由になり、生活全般を通して自分の感性や感覚だけを頼りに思考する状況が可能になることを意味する。その結果、円はより大きなものとなり、達成できる学びは生徒一人一人の受け止め方によっては無限に広がる可能性がある。

＜現地で実体験をする段階＞さらにそれを心と身体感覚に沈めてくれるのが沖縄修学旅行という実体験である。沖縄修学旅行は、それまでの学びが結実し、生徒の心と身体に深く内在化されるための実体験となると考える。内在化とは学習者が意識しない身体的レベルで意識下に残ることであり、学校での学びが終了した後も、生徒の人生を通して無限に広がり続けてゆくものであるはずである。

＜実体験から戻ってきた段階＞身体と心で感じ取ったものは、時間を置いても深く残るはずである。それを自己表現させることが最終段階となる。英語教育が、渡邊他（1988）の目指す人間性教育となることを生徒が実証してくれるはずである。

心と身体感覚をしっかりと揺さぶることは、中学校英語が小学校英語に近づくことも意味する。自分の感じたまに間違いを恐れず積極的に英語で表現するライティングに結実させることが、前述したように英語科にお

ける最終目標となる。

Ⅲ. 実験

1. 参加者

対象生徒は 2008 年度京都教育大学附属京都中学校 3 年生（3 クラス 123 人）である。京都小学校時代に、1 年生から 6 年生までの 6 年間、週 1 時間の英語活動を経験している。外国の人とのコミュニケーションには積極的であり英語力も高いが、一般の中学 3 年生同様、年齢が上がるにつれライティングやスピーキングといった自己発信への意欲には低下傾向が見られた。

2. 題材

当学年は 3 年生進学直後の 5 月に沖縄への修学旅行を控えていた。そこで、6 月までの 3 か月間というスパンで、平和学習という一連の取り組みとのクロスカリキュラムとして、「国際交流・そして国際平和を願う心の育成」を核とした指導の流れを構築することとした。これは小学校英語が重視する国際理解教育を継続する意味もある。3 年担当教師との交流の中で各教科の指導内容を把握し、それに一致する形で英語科の指導内容を組むこととした（表 1）。各教科の指導内容とタイミングよく絡めることを意識して、英語科の指導内容の導入時期を決定していった。

表 1 クロスカリキュラムにおける指導内容

教科	指導内容
社会	沖縄の地理／沖縄の歴史／第二次世界大戦における沖縄の状況／現在の沖縄の問題
国語	原爆をテーマにした文学作品／沖縄に関する詩／戦争をテーマにしたディスカッション
理科	沖縄で見える星座／沖縄の自然環境（気候・生物・植物）
音楽	「ていんさぐぬ花」合唱／沖縄特有の言葉と意味／沖縄の楽器サンシンについて
道徳・学活	NHK「その時歴史は動いた」「ひめゆりの塔」など沖縄戦に関するビデオ鑑賞／沖縄文化の調べ学習／沖縄戦に関するレポート作成／千羽鶴作成
英語	「貞子と千羽鶴」 ¹ ／「母さんの木」 ² ／異文化理解学習 ³ ／Imagine とベトナム戦争／沖縄戦

¹三省堂 New Crown 3 “Sadako and the Thousand Paper Cranes”（原爆症で亡くなった佐々木貞子さんと原爆について）

²東京書籍 New Horizon 3 “A Mother’s Lullaby”（8 月 6 日の広島を目撃した木の回想からなる物語）

³10 年前から継続しているタイの中学校との交流を中心に、異文化と自国文化を尊重する態度と相互理解を促進するためのタスクを設定した。

4. 指導の流れ

具体的なライティング指導であるが、最初から平和学習に的を絞るのではなく、生徒に課すライティング・テーマの難易度を徐々に上げることで、生徒の書くことへの抵抗感を取り除くことを意図した。易しいテーマの段階でも、タイのクーデターや中国大地震を取り上げ、最終的にはグローバルな視野の育成と平和を願う心につな

げていくことを意識した。平和が当たり前ではない外国のニュースを、人ごとと感じなくなることがまずスタートであると考えたからである。

中学生は綴りや文法上の誤りといった下位単位に拘泥するため、自由英作文には非常な抵抗感を示す。それを取り除くため、自由英作文の際に教師は「綴り及び統語上の誤りには言及しない」「訂正はリキャスト（教師が気づいた時にさりげなく正しく言い換える）のみとする」「内容重視のフィードバックを重点的に行う（書き手の内面が伝わる作品を大きく評価し、他生徒にも伝える）」ことを心がけ、ALTにも徹底してもらうこととした。例えば、ALTにアメリカのことをインタビューして新聞にまとめる活動では、生徒個々の興味関心及び社会的知識のレベルに応じて自由に取材計画を立てるタスクとしたため、真に自分が知りたい情報を得るという目的を持って取り組めたようである。イラク戦争のことやアメリカ大統領選挙のことを話題に選んだ生徒もあり、ALTも大人に対するように真剣に回答してくれたため、その英語が難解すぎて苦勞していた生徒もいた。しかし、そこで聞いた未知の語彙や地名を後日調べることで理解を深めるなど、やらされているのではなく自分が知りたいから勉強する姿勢が培われたようである。完成した新聞は、従来の自由英作文やレポートとは比較にならない量の英文で埋められていた（図2、3）。このようにして3か月間に10回ほどの自由英作文の時間を持った。6月、沖縄修学旅行終了後に体験をもとに自分の思いを書くことが最終の活動となる。

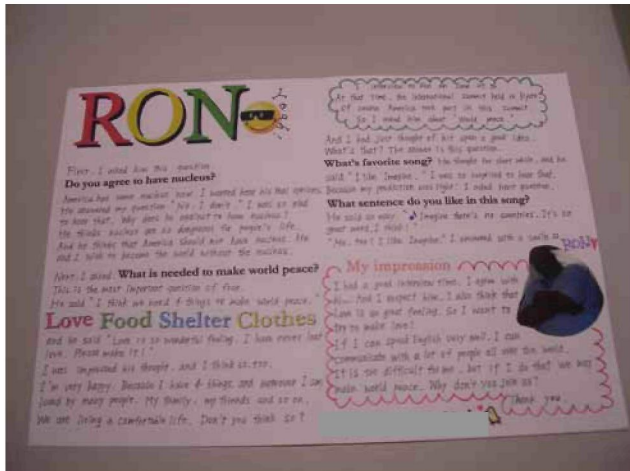


図2

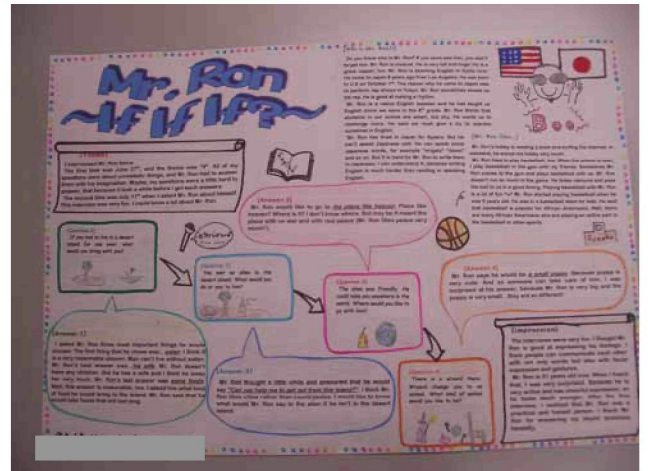


図3

IV. 結果と考察

1. アンケート

3か月間にわたる取り組みの中で、英語での自己表現に対する生徒の意欲の変化を調べるため、簡単なアンケートをとった。徐々に難易度の上がる4つのテーマ（テーマ1：「外国の友達の大切さについて」、テーマ2：「Imagineについて」、テーマ3：「修学旅行について報告文を書こう」、テーマ4：「沖縄で感じたこと…自分の思いを綴ろう」【最終の活動】）でライティングを行った直後に、同じ2つの質問（A. このテーマでライティングするのは難しかった。B. このテーマでライティングするのは楽しかった。）に回答した。

Yes と答えた生徒の人数を割合で示した結果は図 3 のとおりであった。時系列に沿って徐々にテーマの難易度が上がったにもかかわらず、後になるに従い「難しい」との回答が減り (A), 逆に「楽しい」とする回答が増える (B) 傾向にある。テーマ 4 は最も難易度が高いため「難しい」との回答が微増したのは当然と言えるが、それでも最初の 2 つのテーマに対する「難しさ」には及ばず、5 割を切っている。また「楽しい」との回答の割合は最終的に 60% に達した。以上の結果から、テーマの難しさは、ライティングに対する生徒の抵抗感 (難しい、あるいは楽

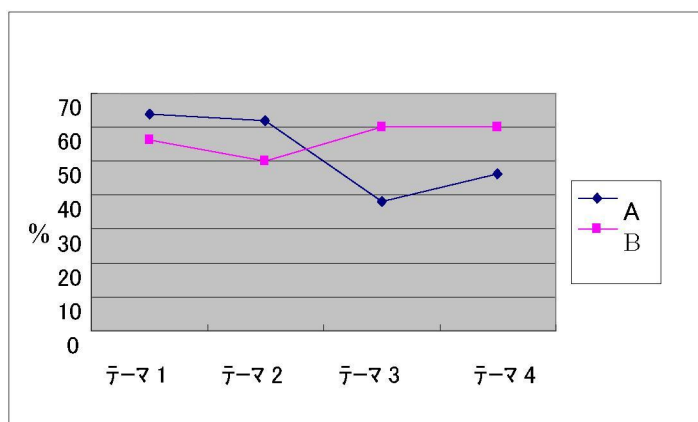


図 3 アンケートにおいて Yes と回答した割合

しくないという気持ち) に比例しないことがわかる。中学生の成長過程にふさわしいテーマが難易度の高いものになるのは当然である。むしろ、そのテーマに対して生徒が内在化した知識・感覚を持っていれば、内から沸き起こる自己表現への欲求につながり、ライティング活動は易しくかつ楽しい作業になりうる可能性が示唆された。

2. 生徒作品の分析

生徒の作品を見る上では、統語上の正確さにおいては向上したようには思われない。しかし、アメリカ人の ALT によると、生徒の文章は十分理解できるだけでなく、書き手の思想や思いが強く感じられ、胸を打たれたとのことである。これらは従来の授業では見られなかったことである。自意識の育つ中学生は、小学生のように間違いを気にせず英語を口にすることはできない。スピーキングよりライティングを今回のテーマに選んだのは、それも大きな要因である。しかしライティングにおいても、日本語でさえ難しい「自己の内面を表現する」作業において、「間違ってもいいから自由に書きなさい」という指示だけでは中学生は 1 行も書けない。必要なのは教師による指示ではなく、心を揺さぶられる体験から湧き上がってくる思いを「表現したい」と感じる生徒の心的・身体的反応である。次に挙げる作品は、生徒が様々な感動を身体で受け止め、過去のその場に自己が存在したかのように感じた様子を如実に伝えている (下線部は身体感覚に基づく表現。下線および日本語訳は筆者)。

People in Okinawa hope for peace. I felt it from their culture, for example, nature, music, language, dance and so on. I remember sanshin, or eisa very well. When we went the concert at night, the sound of the sanshin sounded for beautiful sky. The sun set between trees, and it got dark, and there were wind and sea. The sound matched with the view. I felt it sounds for that dark Gama and Ryukyu, a long time ago. Ryukyu was a peace country, and didn't know the war. I think the sanshin is delivering the wish of peace for Gama and the past. So the girls in Gama thought to finish the war. Peace is wish of all people in the world. So we must do something. Japan lost the war. But we have great culture. People in all over the world have a mind that feel great about our culture. I know it now. There are countries doing war now. But I don't know about it at all. So I want to learn about it. We can tell what we had learned to around people. I want to send.

沖縄の人々は平和を望んでいる。それは彼らの文化から感じられる。例えば自然、音楽、言葉、踊りなどだ。サンシンとエイサーはよく覚えている。夜のコンサートへ行ったら、サンシンの音が美しい空に響いていた。

木々の間に日が沈み、暗くなり、風と海だけがあった。その音はこの景色にぴったりだった。サンシンの音で私は、はるか昔のガマや琉球に思いをはせた。琉球は平和な国で、戦争の経験さえなかった。サンシンはガマや過去にも平和への願いを送り届けていると思う。ガマの少女たちは戦争を終わらせたかった。平和は世界の全ての人の願いだ。だから私たちは何かしなければいけない。日本は戦争に負けたが優れた文化を持っている。世界中の人が自分たちの文化に誇りを持っている。そのことで何かを学び取りたい。自分たちが学んだことを他の人にも伝えることはできる。私は伝えたい。

「小学生は心と体で英語ということばを受け止めている」と第1章で論じたが、同じ力を中学生も潜在的に持っていることを、生徒の作品は示している。実際に、Imagine や Blowing in the wind のようにメッセージ性の高い歌をバックグラウンドとともに導入すると、教室は水を打ったように静まり返り、生徒が瞬時に歌の世界に浸ることが手に取るようにわかる。メロディも歌詞もすぐに覚えてしまうのは、心と身体の双方で受け止めている証拠である。歌への感想を書かせると迷いもなくすぐ書き始めることができ、所々歌詞を引用しながらのライティングは素晴らしい作品となる。心が揺さぶられている時は、「下位単位の誤りに拘泥する」いつもの癖は影を潜める。

筆者は担任として道徳・学活の授業も担当したが、既に事前学習の時点で、感受性の豊かな中学生たちが沖縄戦の悲惨さに涙ぐむ場面が見られた。実際に沖縄を訪れた後は、「背中がぞくぞくするほどの感動（あるいは恐怖）を覚えた」「今は平成で平和な時代だと自分に言い聞かせても、そちらが夢だったのではないかという気がして怖くて友達の手を握りしめた」「多くの人が亡くなった壕の中では、そんなはずはないのに血のにおいがした気がした」「さとうきび畑の向こうで本当に人のざわめきが聞こえた気がした」と、五感で受け止めたさまざまな体験を語ってくれた。それらが日本語による体験だから英語には関係がないと考えるのは、「言葉の教育」を表面的に捉えた見方である。どの言語であれ、言葉とは、人間の心と体に直結しているものであり、言葉によって心と体が激しく揺さぶられた人間にとって、言葉を通して思いを表現することは自然な行為となる。それを英語で行う場面を自然に設定するために、一連の学びを極力英語でも行ってきた。

従来と同様の教材を使用したにも関わらず、この実践を通して生徒が大きな成長を見せてくれたのは、クロスカリキュラムに負うところが大きいことは言及するまでもない。教科の学習という意識を払拭しあらゆる場面を通し生徒の情動面に働きかけたからこそ、日本語と英語の見事なコラボレーションが実現できた。例えば社会科で沖縄の歴史を習った直後であれば、日本語で深い理解をしていることをふまえ、イラク問題を絡めながら歴史や戦争の話題を英語で語っても生徒は高い理解力及び興味を示した。その展開が自然であったからこそ、修学旅行という現地体験を積んだ後の英語の授業において、英語で思いを綴る活動に自然に入っていたのだと考えられる。

今回、生まれてから経験したことがないほどに心が揺さぶられる体験をした生徒は、テーマ4「沖縄で感じたこと…自分の思いを綴ろう」の段階で、今までにない分量のライティングを、そして今までにないほどの内面の吐露を実現させた。もちろんそれより早い時期に別の場で日本語での感想文を書いているが、どちらかという和陈腐なものであり、それ以上に英語でのライティングで自己をありのままに表現できていることは驚愕に値する。その理由はわからない。涙したことなど、特に男子であれば素直に書けないことであっても、英語では I cried. とさりと記している。思春期にある生徒の複雑さは、そのあたりにあるのかも知れない。であるならば余計に、母語以外の言語による心と身体への豊かな働きかけはかけがえのないものだということになる。これらの作品を

印刷配布したところ、クロスカリキュラムにおける指導に関わってきた3年担当教員だけでなく、保護者からも感動したという声が多く寄せられた。書き手の思いを伝えるためには、正しい英語、あるいはむしろ美辞麗句を駆使できる日本語の方が、必ずしも優れているわけではないことがわかる。

V. 終わりに

沖縄修学旅行の行程の中で、日本で唯一の地上戦を体験された語り部の方からお話を聞く機会があった。アメリカは酷いことをした、という反米的論調で終始お話されていたのが国際理解の観点から気になったが、当事者の感覚は被害者以外の何ものでもないのだろうと理解した。その壮絶な戦争体験を生徒に語ってくださった後、語り部の方が、「最後に、中学生の皆さんに、お願いがあります。」とおっしゃった。意外だったことに、その言葉は「英語の勉強を頑張ってください。」だった。一同が驚いていると、さらに「私は戦後、英語を勉強して、長くアメリカで仕事をしていました。そして感じたことは、もし言葉がわかったら、もっと分かり合えたはずだということです。避けられたこともたくさんあったはずです。中学生の皆さんは、英語を一生懸命勉強して、世界中の人と話してください。言葉を通して、平和を作ってください。」と続けられた。綴りや文法の正確さは些細なことであり、臆せず伝えようとする思いが一番大切なのだということ、そして言葉は人と人をつなぐために存在するということを、他でもない語り部の方が生徒に訴えてくださったのだ。ある理念のもとに1つの教育実践を行ってきて、それが実体験の場でこのように思いもかけない形で完結する。これが教育の素晴らしさだと感じる。お膳立てをして計画するばかりでは決して実現しえない学びが、突然やってくる現場に筆者は何度も遭遇している。

タスク4は1時間で書くように指示したが、生徒たちは黙々と集中し、自分の思いを英語の言葉に載せて綴っていた。その中で彼らが、語り部の方の一語一語、戦争資料館にあったパネルの詳細な説明まで記憶していることにも驚かされた。その姿は、小学生が自分の気持ちや身体感覚に素直に従い、英語という未知の世界に浸る姿と、限りなく近づけたように思う。「中学生は自意識が育つから小学校英語のようにうまくいなくて当然」、ではない。中学生の心の成長にふさわしい題材で心を揺さぶることができれば、素晴らしい潜在能力すなわち「言葉への感性」を示してくれる。

それぞれの教科はそれぞれの専門的知識を与えることが一番の目的であるが、それを越えたところで生徒の豊かな成長を手助けできる可能性を秘めている。そのことを教えてくれたのは小学校の授業である。英語の技能を育成することだけでなく、真の意味でのコミュニケーションに対する態度を育て、内容ある発信をする能力を育てられるような授業作りを追求していくことこそ、英語教育の目標となるべきである。小学校と中学校の英語がその精神のもとに一体となることで、その可能性は広がるだろう。

参考文献

- 斎藤栄二. 1984. 『英語を好きにさせる授業』. 大修館書店.
- 斎藤栄二・高梨庸雄・森永正治・渡邊時夫. 1986. 『新しい英語科授業の創造』. 桐原書店.
- 山田雄一郎. 2006. 『英語力とは何か』. 大修館書店.
- 渡邊時夫・高梨庸雄・森永正治・斎藤栄二. 1988. 『インプット理論の授業』. 三省堂.
- Harmer, J. 1983. *The practice of English language teaching*. Longman Group Ltd.